

新聞マンガのつたえる戦時中国社会

内田 知行 (大東文化大学名誉教授)

Chinese Wartime Society Pictured by Comic Strips in A Chinese Newspaper

Tomoyuki UCHIDA

はじめに

『太岳日報』は、中国共産党（中共）が山西省東南部に建設した抗日根拠地政府の機関紙である。小稿では、同紙第19号（1940年7月13日）から第197号（1941年12月30日）のあいだに掲載された4コマ・マンガを紹介する。画質がわるくて、絵の表現力も洗練されていない。今日のマンガ家の眼からすれば、ほぼ素人の作品である。しかし、写真などの映像資料がほとんど残されていない抗日戦争前期の中国の農村社会を生き生きと再現した材料である。近年では、中共の抗日政権の政策をめぐる史料・文献や、そうした史料にもとづいた研究書・論文が、中国語はもちろん英語や日本語にも数多くある。しかし、抗日政権の下に生きた民衆の心理や日常生活を知ることのできる資料は多くはない。小稿では、民衆の暮らしの機微を描いた、そうした新聞マンガとその背景を説明する新聞記事を紹介する。

細々とした資料から歴史の大きな変容を明らかにしたい、というのが小稿の願いである。そして、筆者にはもう一つの意図もある。中共の支配する社会は共和国建国後——ひと昔前は「解放後」と呼ばれていたが——マルクス・レーニン主義の一方独裁国家になった。そして、1990年代以降は市場経済を中共が指導する国家資本主義の社会に変化した。市民の政治的自由を抑圧しながら、国家権力が資金を傾斜配分しつつ工業化＝高度成長を実現し、豊かな社会を目指している。しかし、小稿が描く抗日社会では、中共は日本軍や傀儡軍に向けて自由と人権の大切さを説いた先駆者だった。中共は自分の権力行使を抑制して権威を確立していった。その後は、一大権力者に変身してしまった。それによって、自らが統治する社会をも変質させてしまったのだろうか。小稿では、いまの中国人にとっては過去の歴史であり、私たち日本人に深い印象を与えてくれた社会を復元してみたい。中共はいったいどこからやって来てどこに行こうとしているのか、を考えてみたい。

同時代の日本人は抗日政権下の社会についてほとんど知ることがなかった。たとえば、1940年7月、陸軍省情報部は「抗日支那軍の現況一支那事变三周年に際して」という分析を発表した¹⁾。ここでの主要な分析対象は中国国民政府軍であり、国民政府にたいする軍需品補給状況や国民政府の

経済的抗戦力が議論されていた。日本軍が主要都市を占領したり、沿岸を封鎖したりして中国の物資と金融の操作はますます窮迫を告げているとはいえ、「支那の経済は我われの想像するように、簡単に壊滅するものでない」と分析する。そのうえで、「占領地域内の兵匪の活動状況」について次のように述べていた。「占領地域内にはなお五六十万の兵匪が潜入しており、これに敵側の偽県長、または共産党によって指導される地方自警団を合算すれば、その数、百万に達する」。しかし、日本軍による「不断の掃蕩によって、これ等兵匪も次第に減少し、ことに北支の治安回復は見るべきものがある」と結論づけていた。小稿が分析対象とするのは、「兵匪の活動する社会」と日本軍が考えた抗日社会である。それを当時の中国の資料で復元することによって、日本の侵略者の認識がどんなに中国社会の現実とかけ離れていたのか、を理解することになるだろう。

第一節 日本兵たち

抗日中国における日本軍占領は「点と線の支配」だった。「作品1 敵兵をやっつけろ」は、地方都市を占領した日本軍が、町のなかにくぎ付けだった様を物語っていた。王黒牛というある抗日村の腕っぶしの強い指導者を取り上げたマンガである。王黒牛たちは通りに小商いの商人を装って、やってきた日本兵を撃退したという。

作品1 敵兵をやっつけろ

(出所)『太岳日報』1941年4月27日



1 黒牛さんは計略をもちいて敵を襲撃し、春の耕作を守りました。



2 小商人に化けて、道路で待ち伏せしたのです。



3 3人の敵兵が城内から出てきて、2人が命を落としました。

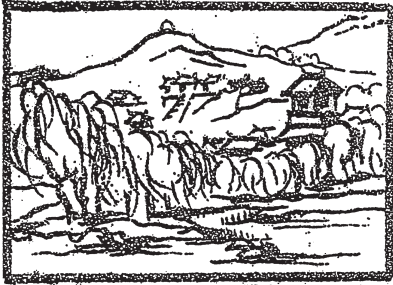


4 亀の頭をたたくように撃退したので、その後は城内からは出てきません。

「作品2 沁源县綿上村」と「作品3 日本兵と王家審の抵抗」は、日本軍が周辺の村々に出かけて行ってなにをやったのか、を描いている。言及されている村の名前は「綿上村」と「王家審」というように異なるが、占領されたときに受けた被害は共通の体験だったことを示している。このマンガでは、抗日村の指導者は葉彦明で、この人は後述のように実在の人物である。

作品2 沁源县綿上村

(出所)『太岳日報』1941年12月3日



1 沁源县綿上村は良いところで、山に囲まれ川が巡り、風景は秀麗です。



2 この村に英雄が現れました。姓は葉、名は彦明といい、虎のような力の持ち主です。



3 去年の冬、日本軍が太岳地方に攻めてきて、家々を荒らし、放火殺人をやりました。



4 これに続いて、伏牛山では悪行が天にとどろき、のろしが大地を揺るがし、綿上村には警報が伝わりました。

作品3 日本兵と王家密の抵抗

(出所)『太岳日報』1941年5月18日



1 敵は南進し、分散して村にやってきて、男たちを勝手に兵隊として徴募した。



2 講談や唱歌や演芸などの姦計を弄して、観衆をだまして男たちを捉まえた。



3 王家密では、民兵を訓練し、みんなに武器をもたせ、春の耕作を保障した。



4 村々を連ねて防衛を進め、敵を撃破したから、日本兵は村々を横行できなくなった。

では、日本軍による侵攻作戦はどんなものだったのか。1941年7月23日、沁県の抗日の村、故県鎮（当時定期市を開いていた）を大砲2門、軽機銃3丁を携行した日本軍200余人が襲った。「故県鎮を襲った敵を撃退する」という新聞記事では、その経過を次のように伝えていた。

「敵が出動したという情報を探知すると、当地の民兵は民衆を守って次々と鎮から脱出した。賑やかな定期市はまたたく間に人っ子一人いなくなった。数十人の民兵は洪嶺山に身を隠して、やって来る敵をせん滅しようと待ち構えた。犠牲救国同盟会の決死隊も知らせを聞いて駆けつけ、作戦に協力した。……夜になると、決死隊と民兵は敵軍が逃げることのできないような布陣を敷いた。一部は神頭山で待ち伏せして敵の援軍を阻止した。一部は洪嶺山の陣地を守った。青年抗日先鋒隊も勇敢に参戦し、東西両面を死守した。夜中になって大きな銃声が聞こえると、敵軍はあわてて激しく発砲して南に突破しようとした。敵軍がちょうど村からでたところで、民兵がマージャン戦を展開した。つまり、四方八方から銃声をあびせて、敵軍を大混乱におとしめ、逃げ道をふさいだのである。24日早朝まで戦闘が続いて、敵はやっと包囲を突破して逃げた。神頭山の山腹まで行くと、待ち伏せするわが軍の攻撃を受けた。敵はクモの子を散らすようにあわてて逃げたが、結果として大佐一人が撃たれて死に、17人が死傷した」²⁾。

また、「沁県盤道村では、引火によってわが身を焼き、村に災いをもたらした」という1941年6月の記事では、周辺の村々を略奪して戻った「維持村」（日本軍に応じて傀儡の村政府を作った村）における強姦被害を伝えていた。

沁県四区からの通説によると、「5月25日朝、城内と大橋溝の日本軍とかいらい軍100余人は、本区の東郷を荒らした。昼間の12時には、水凹村一帯に至り、姦淫略奪をし、午後6時ごろに駐屯地の盤道村にもどった。この村は1か月前に周りに知られないようにこっそりと「維持村」になった。日本軍に頼れば、隠れたり防御したりすることもないと考えた人がいたのである。しかし、敵軍はひとたび村に入ると村を包囲して、穀物を略奪したり、鶏を獲ったりなんでもやったのである。村人たちは形勢が不利とみて、やっとうい婦人たちは村外に隠すことにした。「纏足の女性のために駕籠を門前に付けた」が、すでに間に合わなかった。一群の婦人たちは村の入り口に着かないうちに、早くも敵につかまってしまい、2軒の大きな部屋の中で素っ裸にされて、一晚中強姦されてしまったのである。…翌日野獣たちは立ち去ったが、永遠に忘れられない恨みを刻んだのである。この時の統計では、22人の婦人が輪姦されたが、このなかには50歳の老女もいた。略奪された物のなかには、布団9枚、銀貨100元、その他108点以上の用具があった。この村が得た教訓はなにかというと、「維持村」というのは張り子の虎にすぎず、ひとたび破られると、騙された村人たちはかんかんに怒り、大いに後悔するということである」³⁾。こともあろうに、占領下の村で思いのままに掠奪強姦するのは、日本軍は抵抗者を増やすばかりだった。

すでに厭戦感情をもっていた日本軍には、規律の乱れが発生していたようである。「皇軍の墮落(立金)」という記事には、次のような情景が描かれていた。山西省の洪洞・趙城に駐屯していた日本軍のケースだった。「厭戦感情が非常に濃い。こうした厭戦に由来する苦悶や不満は、娼館や酒樓で発散させざるをえない。しかし、最近では彼らの労苦はきわめて深い。この4か月給与が支払われず、金がないのである。そこで、夜になると路地の暗闇で、いつも次のような会話が聴かれるのである。『銃1丁に弾50発。まだあるよ……、20元ならば……』。『いや、10元でどうか。また明日の夜……』『いいよ、10元で。じゃあ、明日の夜……』。こうして2、3人の人影が散っていく。いつもの黒い影が娼館やアヘン館に入っていく。そういうわけで、敵軍の武器庫の銃や弾薬は、太君[タイクン、日本軍将校]がどんなに厳しく管理していても、日に日に減っていくのである」⁴⁾。ゲリラ戦を展開した中国共産党軍にとっては、武器の供給先は国民政府よりも日本軍やかいらい軍だったと言われるが、そうした事態が密かに進行していたのである。

第二節 村びとの抗戦活動

日本軍は、いつも食糧は現地調達主義だった。つまり、占領地では掠奪者だったのである。それにはたいする村びとの抵抗が、「作品4 食糧防衛戦」だった。つまり、待ち伏せによるゲリラ戦だった。ゲリラ軍はおそらく八路軍(中国共産軍)だったと思われる。日本軍の大部隊による侵攻に直面したら、村びとを山の中に退避させるのが有効な戦術だった。これを当時のことばで、三国志の時代から採られていた「堅壁清野」とよぶ。村びとがこの戦術を採った様をつたえるのが「作品5 英雄葉彦明が現われた」である。このマンガでは、力持ち葉彦明が「村の英雄」として称賛されていた。ただし、「作品6 葉彦明の大活躍」によれば、葉彦明は村びとを動員してゲリラ戦をおこなった指導者でもあった。抗日政府は葉彦明に褒美として小銃をあたえ、機関紙『太岳日報』でも表彰した。

作品4 食糧防衛戦

(出所)『太岳日報』1940年8月11日



1 王家荘では豊作です。日本兵が食糧の略奪にやってきました。



2 早くゲリラ部隊に連絡し、日本兵をやっつけてもらおう。



3 待ち伏せ作戦で、日本兵をきれいさっぱりやっつけよう。



4 敵軍にたいして食糧防衛戦をやったら、もう略奪には来ないだろう。

作品5 英雄葉彦明が現われた

(出所)『太岳日報』1941年12月6日



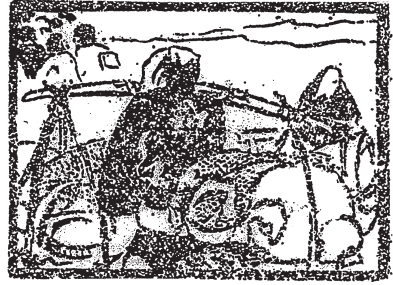
1 葉彦明は村中の勇士を集めて、敵をやっつけ家を守るための計略を相談しました。



2 この時に、村人の退却を援護することをききました。手分けして人を派遣することになりました。



3 葉彦明は年老いた老母を背負い、風のように疾走して、山の中に入りました。



4 その後で、多くの女性や子どもを送りました。彼は肩ひとつに100キロを背負い、鍋や竹籠や布団を担ぎました。

作品6 葉彦明の大活躍

(出所)『太岳日報』1941年12月18日



1 荒らし回った日本軍はわが軍に攻撃され、兵士も将校も傷を負って、つぶれてしまいました。



2 葉彦明が日本軍をやっつけた物語は、神話のように、村々に伝わりました。



3 抗日政府はとても喜び、葉を表彰して、小銃1丁を褒美に与えました。



4 生き残った日本軍はほんの僅かで、英雄葉彦明の名前は遠くまで伝わりました。

葉彦明は実在の人物であり、「太岳風光:葉彦明」という記事では、次のように紹介されていた。「工人英雄の葉彦明は大工である。今年ちょうど25歳になる。綿上村では有名な『力持ち』で、普段200斤の重さの荷物を持って山道を歩いても、顔色も吐く息も変わらない。母親と女房を抱えて、鉄のような二つの肩と職人の技術を持って、苦しい生活を支えてきた。1939年の夏に綿上村に工

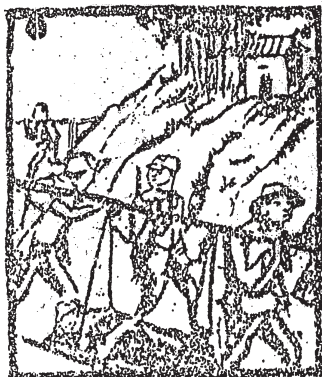
会ができた。工会が労働者自身の組織であるを知って、彼はただちに工会に参加した。1年間、工会のために汗水流して働いた。そこで、労働者のあいだで高い威信を勝ち得た。1939年、村長の汚職にたいする反対闘争が起こり、1940年春には労働者の生活改善闘争が起きた。これらはいずれも彼が組織し指導した。去年の冬、彼は村の工会秘書に選ばれた」⁵⁾。

第三節 村の救国会運動

「作品7 負傷兵たち」は村に組織された、農民救国会、婦女救国会および児童団という代表的な大衆団体の仕事を描いた作品である。「作品8 王黒牛さん」は、すでに作品1で登場した王黒牛（農民救国会の指導者）を紹介するマンガである。

作品7 負傷兵たち

(出所)『太岳日報』1940年7月19日



1 農民救国会の会員が負傷兵を運んできました。



2 児童団が彼らを歓迎しました。



3 婦人救国会が彼らをねぎらいました。



4 最も光栄なのは負傷兵です。

作品8 王黒牛さん

(出所)『太岳日報』1941年2月18日



1 王黒牛は村の農民救国会員です。



2 日本兵に家を焼かれるのは、耐えられません。



3 みんなで一緒に立ちあがろう。



4 お互いに助け合えば、どこに住んでも心配ありません。

農民を中核として結成された農民救国会は村で最も強力な組織だった。それは、「抗日救国」を叫ぶ政治団体というよりも、村の経済の産業基盤整備を推進する組織だった。「洪洞県の曹生村南、用水路の建設に着工」という記事によれば、県農民救国会が主体となって1941年春に用水路の建設が始まった。

「洪洞通訊。本県の農民救国会では、この春以来、『乾燥地の10分の1を灌漑地に変えよう』ということを何度か討論した。2月14日に水利委員会が結成され、関係する村々から13人が委員に選ばれ、工事を担当することになった。3月初めに、水利委員会の努力の下に、用水路の導線が画定され、着工資金が集められ、揚水設備が用意され、材料が購入された。取用された土地の賠償方法や工事の監督警戒などの問題も解決された。用水路の面積は5平方華里で、灌漑可能面積は2000ムウ余[133.4ヘクタール]になる。この工事が完成すると、おそらく地価は10倍に跳ね上がり、穀物生産量も8～10倍に増えるだろう(過去の地価は1ムウあたり10元前後、産量は2斗前後)。工事完成には1ムウあたり人夫2人、銀貨2元を要するだろう。旧暦3月末には完成予定である」⁶⁾。以上のように、用水路の灌漑面積は2000ムウ余で、穀物生産量は灌漑前の8～10倍という見込みだった。

村の農業生産については後述するが、農民をうながして耕作や荒地の開墾を実施したのも農民救国会だった。以下は、霍県農民救国会の活動である。「本県農救会は、2月末に各村に幹部を派遣して、春の耕起作業を援助した。農民たちに呼びかけて、一日も早く耕耘を促し、敵による耕地の破壊防止を呼び掛けた。農救会はまた、300ムウの荒地の開墾を決めた」⁷⁾。

第四節 村の農業生産

村で最も大切な仕事は農業生産だった。しかも男たちの多くは戦場にでかけていたり、戦争をやりながら畑仕事をしたりしなければならなかった。だから、農業生産はばらばらではうまくいかなかった。とくに春先の耕作はみんなが力をあわせて作業をしなければならなかった。「作品9 王家審の春」はそうした村の情景を描いていた。このマンガの原文では「糞」(肥料)を畑に運んでいた。犁起しのまえの土壌改良作業である。牛や馬の糞尿や鶏糞などを利用した肥料を指していたと思われる。

「作品10 農業互助は生きる道」では、村の指導者のもとに共同作業が行われたこと、男手が兵士になって村を出ていた家族(抗日兵士の家族)への援農支援が大切な作業だったことを説いていた。出征兵士をだした「お婆ちゃんのかわりに代耕した10ムウ」は、約66アールの畑だった。説明文とは別にこのマンガは興味深い社会史の事実を教えてくれる。それは、犁耕に利用された役畜は1頭だでの牛だったこと、犁耕を担当したのは男性で、女性は鋤で耕起作業をしていたこと(男女の役割分担)である。

作品9 王家審の春

(出所)『太岳日報』1941年2月24日



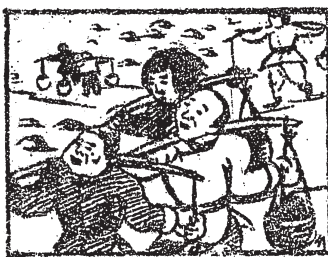
1 王家審に春がきて、赤い陽をあびて樹々のこずえが揺れています。



2 村政府の王秘書はきちんと計画をたて、春耕にそなえて会合を呼びかけます。



3 スキやマグワや農具をきちんと修理しよう。



4 まずは肥料を土地に運びこもう。

作品 10 農業互助は生きる道

(出所)『太岳日報』1941年4月6日



1 周囲の隣人たちがやってくると、黒牛さんは口を開いて話しました。



2 土地は多くて、労働力は少ないから、互助だけが生きる道だ。



3 男は牛にスキを牽かせ、女は土を掘り起こそう。汗して働くのはすばらしい。



4 王二お婆ちゃんは抗日兵士の家族だから、お婆ちゃんのかわりに10ムウの農地を耕してあげよう。

抗日兵士家族にたいする援農支援を、「抗戦軍人の家族は、なんでもみんなで世話しよう」という記事では、次のように説明していた。

「抗戦軍人家族優待条例は全文17か条である。主要な項目は、(1) すべての抗戦部隊（国民政府の中央軍、中共の八路軍、犠牲救国同盟会系の決死隊など）の現役軍人は、生産から離脱しないで、あるいは部分的に生産から離脱して人民武装に参加している人以外に、優待の権利を受けられる。その場合は、部隊の証明書が必要であり、その兵士の直系親族はすべて権利を有する。もしもその軍人が逃亡したならば、優待は停止される。(2) 優待の方法は数多くある。慰問や表彰の賞状発行、表彰の徽章や表彰旗の贈与、肥料運び、水運び、薪割り、職業の紹介、入学時の学費免除、病気の治療費免除、兵士書簡の郵送、耕耘の代理などである」⁸⁾。

村ではどのように農業生産をやろうとしていたのか。その段取りについて、「村の春耕委員会はなにをしなければならぬか？」⁹⁾では、次のように説明していた。

当面の困難については、7点が指摘されていた。「一、耕作用の牛、農具、種子の不足。二、抗日軍人家族の土地または耕作能力のない貧困農民の土地、耕作できない土地。三、用水路の開削や川

瀬の修理など集団に利益のある工事、および荒地の開墾などの志願にもとづく事業。四、生産量の向上。五、すべての春季耕作に参加できる労働力の動員と足りない労働力の補充。六、農民が自発的に互助をするさいに必要とされる指導。七、農民のその他の困難（たとえば牛の飼葉の不足、人間用の穀物の不足）。

こうした困難を解決するために「村春耕委員会」の結成が提起された。委員会は、「委員は5～7人で、村の各機関や士紳〔抗日政策を支持する地主〕あるいは農業の経験の豊かな老農民のなかから推薦される。…春耕委員会の下に閭や鄰ごとに春耕大隊や春耕小組を置き、大隊では大隊長や副大隊長を、小組では小組長を選ぶ。いずれも閭や鄰で民主的に選挙しなければならない。…指導者は、定期的に農家を単位とした春耕小組会議・小組長連席会議・大隊長連席会議・春耕委員長会議を開かなければならない。各級会議間の定期的な報告制度と上下組織間の相互検査制度とを実施しなければならない」。もともと、こうした制度の運用については、次のような配慮が求められた。すなわち、「(これらの制度を実施する要求については)早すぎてはならない。というのは、春耕中にそれがうまくできないことを恥ずかしく思っているから、要求が高すぎるとできないからである」。

ちなみに最も重要な課題ともいえるべき第1、第2点の解決については、次のような解決策が提起されていた。すなわち、「耕作用の牛・農具・種子の調達のための具体的な条件や方法は、それぞれの農家が自分たちで相談しなければならない。しかし、春耕小組・大隊・春耕委員会はこれらの工具を所有する農家と所有しない農家とを招集して会議をひらき、解決を支援しなければならない。同時に、所有戸が価格を吊りあげて暴利をむさぼったり、借用しようとする農民が損をしたり、耕牛や農具を貸し惜しみしたりすることがないようにしなければならない。自発性を重んじて、農家による耕牛や農具などの共同購入を組織し、村単独であるいはその他の村と連合して農具の購入委員会や農具工場などを作ってもよい」。また、兵士の遺家族や労働力のない貧民の農地耕作については、次のような提案があった。「春耕委員会の指導下に耕作代行隊を作らなければならない。村の18～40歳のすべての壮年男性は代耕参加の義務を負い、必要な場合は児童や婦人も別途補助者として組織しなければならない。代耕は一般に義務労働であり、代価を取ってはならない。ただし、毎季(春耕、夏耕、秋収)の義務労働は一般的に5日間を超えてはならない」。軍人家族にたいする援農活動は、男性を徴兵されて疲弊していった日本農村とは好対照だった。

第五節 村の女性たち

「作品11 「三八」 婦女節」は3月8日の「婦女節」を祝賀する作品である。3月8日は現代の中国でも記念日として祝われており、日本でも最近では「国際女性デー」として集会などが開かれている。女性の社会的地位の向上への関心という点では、抗日時代の中国は同時代の日本よりも進んでいたと考えてよい。このマンガでは、村人の「三大任務」の遂行が目標として示されている。それは、選挙(村の指導者を選ぶための投票行動)、武装(民兵の組織化)、生産活動(マンガで描かれているのは養豚)であった。村の婦人たちのもっこ担ぎも生産活動を示していた。

作品 11 「三八」婦女節

(出所)『太岳日報』1941年3月9日



1 「三八」婦女節がやってきた。黒牛さんは宣伝に駆けまわっています。



2 王家窑では大会が開かれ、人がたくさん集まって盛況です。



3 三大任務の作戦をたて、男も女も協力して担おう。



4 王黒牛は大笑い、今日の婦人はだれにも負けません。

女性の権利を実現するために、当時の抗日社会ではどのような目標が提唱されていたのだろうか。当時張維奇という人物が書いた文章には、次のような目標が紹介されていた。「一、婦人参政権の取得。二、婦人の財産継承権の取得。三、婦人の抗日自由の取得。四、婦人の教育を受ける権利の取得。五、婚姻自由の取得と父母による勝手な婚約取り決めにたいする反対。六、婦人の売買にたいする反対。七、婦人の殴打や罵倒にたいする反対。八、童養媳（売買婚という形の幼児婚）にたいする反対。九、婦人が自己の財産を独立して保管する権利を有することの保証。十、一夫一婦制の実行」¹⁰⁾。目標のすべては、ブルジョア民主主義社会における女性の権利の獲得を指していた。

王善玲の報告によれば、1940年3月8日、「太岳区婦女救国分会」が設立された。そして、1年間に識字教育や生活改善・生産活動・参戦動員などの分野で成果があったという。「教育活動では、いま区全体で310の婦人識字班がある（沁県は除く）。識字班参加者は、6県だけで1993人いる。一番多く字を知っている人では1000字の人がいる。青陽湾の婦人は秋取時に暇をみつけて識字学習をしている。沁県の多くの村では、秋取のときに新たに学んだ字を鎌の柄に書いておぼえている。…婦人の生活改善闘争は、4県だけで1年間に68回行われた。闘争の内容は、婚姻問題、虐待反対、抗日自由主張、財産継承権取得などで、この他に一般的な民主民生闘争や敵軍との闘いなどがある。…生産活動では、昨年沁県や屯留県で春耕の互助組織に参加した婦人は1000人以上いて、605ムウの土地が耕作された。この他に、不完全な統計ではあるが、養鶏は2万3865羽、植樹は1万

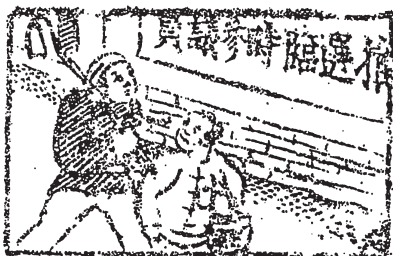
0151本の成果があった。…参戦活動では、1年間に兵士に多くの慰労品を出した。特に表彰に値したのは、沁県の婦人幹部が指導した婦人活動で、送電線を5回切断、100余斤[50キログラム]獲得し、橋を1か所破壊し、村の自衛隊と協力して道路を破壊し、各地に婦人自衛隊を設立した」。もともと、報告によれば、「多くの婦人はまだ組織されておらず、婦人自身の利益にたいする注目が不十分である」と指摘されていた¹¹⁾。

第六節 村の政権建設

抗日の村は民主主義の村にならなければならなかった。選挙によって村の政治代表を選ぶことの大切さを教えようとする作品が「作品12 村の政治代表を選ぼう」だった。このマンガには「臨時参議員を推薦しよう」というスローガンが示されていた。参議員とは抗日政権の立法議会の議員を指していた。村から選出された代表として政権に意思表示する役目を負っていた。

村選出代表の仕事は多角的であり、抗日の政治的アピールをやり、農作業(春の耕作)を率先してやり、村を日本軍から守る民兵を訓練する仕事もやらなければならなかった。そうした役割を描いたのが「作品13 王黒牛さんの呼びかけ」だった。このマンガでも、春の犁耕に使用される役畜は牛だったことが描かれていた。

作品12 村の政治代表を選ぼう



1 政権参加の大きな浪が、王家窑村を席捲しています。

(出所)『太岳日報』1941年5月6日



2 黒牛さんには社会の圧迫はやり切れません。



3 民主政治になれば、人民は束縛を受けることなく自由に動き回れます。



4 村中の老人や青年が、黒牛さんを自分たちの代表として推薦しています。

作品 13 王黒牛さんの呼びかけ

(出所)『太岳日報』1941年3月27日



1 王黒牛さんは街頭にたち、隣人たちを集めて言います。「親日派は裏切り者だ」。



2 逢う人ごとに宣伝します、「彼らを打ちたおすのは、難しくない」と。



3 「春耕をするには、時間を無駄にし
てはいけません」と呼びかけます。



4 「早く民兵を訓練しよう」と呼びか
けます。

抗日時代の中国共産党は、現代の中共政権とは異なり、自らの権力行使には抑制的であった。支配の正当性を強引に民衆に押しつけようとはしなかった。言論の自由を保障して、民衆の自主性を育てようとした。そのために、当時抗日の村で中共が提唱したシステムが「三三制」という制度だった。『「三三制」を擁護しよう」という記事では、それを次のように説明していた。

『「三三制」とはなにか?』『三三制』とは、抗日民主政府の官吏がある一党ある一派に独占されてはならないということである。抗日に賛成し民主に賛成する各党各派が、無党無派の人士と共同で事に当たるということである。このようにして組織された政府は、けっして『一党独裁』の政府であるはずもなく、各党各派と無党無派の人士による共同合作政府なのである。政府の中では共産党員が三分の一だけ、あるいは三分の一未満を占める。残りの三分の二はその他の抗日党派や無党無派の人士が占める。たとえば、それは普通の農民や知識青年や各流の紳士や開明地主たちである。共産党のこのような『独占を願わない』『大切なことはみんなと相談する』精神は、我われが擁護しその他の党派が学習するに値する『三三制』の政府であり、必ずや各党各派がもっと団結することができ、民衆の利益をもっと保証することができ、日本軍をやっつける力をもっと強固にすることができるのである。『三三制』にはこうした長所があるのだから、我われは『三三制』を擁護しなければならない。『三三制』こそが新民主主義の政権形式なのである¹²⁾。まことに、一党独裁政権を実現して久しい中国共産党の指導者に聞かせたい金言である。

さて、三三制は村ではどのように実行されたのだろうか。「北石村の選挙は勝利した」¹³⁾では、

北石村という小村の先駆的な実践を紹介していた。北石村は南を沁河の河岸に面した小村で、全村89戸、人口361人、村内の土地は2218.5ムウ〔1ムウ=6.6アール〕、うち平地は840ムウ、傾斜地は1140.5ムウだった。民国初年以來、平地589.5ムウを「県城内と中峪店の金持ち」に小作地として取られていた。だから毎年の小作料520石を供出すると、村民が得られる穀物は2353石だった。「小作地を耕して生活していたのは45戸で、村の戸数の半分を占めた。大半の家は貧農と中農で、地主は1戸だけだった」。この村には、長いあいだ宗族の争いが続いた。地主勢力を代表した甲派と富農中農を代表した乙派であり、村長選挙では争いが絶えなかった。「民国23(1934)年から27年までの4年間に9回村長選があつて、甲派が5回、乙派が4回勝つた。北石村の矛盾は深刻で、村長の任期が短命だったことは、推して知るべしである」。

民国28(1939)年にこの村にも各種救国会が設立され、村の階級関係も少し変わった。「30戸の富農中農階級のうち、5、6人が村政府に参加した」。しかし、村には十数戸の「青帮」(伝統的秘結社)があり、彼らは地主勢力を支持していた。「残りの30余戸は中立の態度だった」。そして、従来の「宗族の矛盾」は次第に「階級の矛盾」に変化しつつあつた。そういう変化の中で、村の村民代表→村長候補→村長を順次民主的に選挙する活動が、1941年の夏に展開された。活動は以下のように進められた。

7月19～26日：第1期宣伝動員週間…太岳專署からの工作隊派遣

7月27～31日：宣伝動員と「公民登記」(選挙人登録)

8月1～7日：公民小組の区分と小組毎の村公民代表の選出

8月8～14日：村長・副村長選挙と就任式(8月10日)

8月15～21日：村公所と村内4種委員会の設立

「三三制」原則の運用が問題となつたのは、「公民小組の区分」においてであつた。公民小組毎に村の政府を担う公民代表が決められ、彼らの中から7人の村長候補が選ばれた。当初、地理的環境や宗族派閥などを考慮して、男11組(うち客民1組。これは外からの移住者)、女9組の公民小組(各組9～13人)が決められた。のち男組の構成人数を減らし、男組を14組に増やした。北石村には封建的な地主が1戸いただけ、つまりは三三制の一翼をになうべき「開明士紳」はいなかった。次いで、公民小組代表によって7人の村長候補が選出された。7人の内訳は、「貧農雇農の利益を代表したのは1人だけ、中農の利益を代表したのは4人、富裕者の利益を代表したのは2人だった」。各候補者は村内を練り歩き、公約を主張した。村長は、各公民小組の代表による「複数無記名投票」によって選ばれた。同村の具体的な環境や階層や宗族派閥の矛盾を調整して選挙活動が行われたことは、小さな村政権における「三三制実現」の促進につながつた、と記事は書いていた。

第七節 村びとの健康管理

農村の衛生状況は劣悪で、伝染病が蔓延していた。「作品14 村の健康管理」はそうした現実を描いた作品である。村人がどんなふう洗濯していたか、を描いていた。村民総出のごみ掃除も行

われた。お医者さんはロバに乗って往診に移動していたようである。「薬房」(薬局)の壁には「大減価」(大安売り)と書かれており、薬価を吊り上げるような行為は抑制されていたようである。

作品 14 村の健康管理

(出所)『太岳日報』1941年4月12日



1 病人が多くて、ほんとうに大変です。



2 着物を洗濯してシラミを捉まえ、掛け布団を乾そう。



3 通りの掃除をやるう。



4 お医者さんも駆け回っています。

「なぜ伝染病が農村で流行するのか」という新聞記事では、コレラや赤痢などの伝染病が流行する村落の現実を以下のように紹介していた。「今年(1940年)の春と夏の2季に太岳区のいたるところで伝染病が流行った。沁源县のある村では、病人の人数は村の人口の7割を占めた。2戸20人の家族のうち15人が病人だった。健康な人が病人と一緒に寝起きしていたから、次々と伝染して病状はますます酷くなった。この村では、村人50人のうち15人が病気になった」¹⁴⁾。こうした惨状を紹介して、衛生意識の欠如が背景にあったと記事は述べていた。

それではまずいということで、太岳分区が所属する冀魯豫辺区では、1941年12月に衛生組織を設立するための決議をした。すなわち、「辺区政府は、根拠地の衛生活動を強化し、疾病を減らすために、とくに12月15日、第8回委員会を開いて決議した。(一)各級政府は専門の衛生組織を設置し、住民の衛生活動に責任をもつ。(二)各学校・政府機関・部隊・大衆団体は、一律衛生員を増やす。(三)地方に病院を設立し、地方幹部、地方の武装組織、抗日軍人家族や貧乏人の疾病治療を保障する。(四)医師の待遇を改善し、医療技術を高め、功績のあった医療従事者を表彰する」¹⁵⁾。医療技術も人材も財源もないところで、まずは改善のための発端が着手されたということであろうか。

第八節 アジア太平洋戦争の勃発

1941年12月8日の日本軍によるハワイやシンガポールなどへの同時侵攻作戦によってアジア太平洋戦争が勃発した。アジアにおける第二次世界大戦の開始だった。中国の抗日社会ではこの大戦争の勃発はどのように受け止められたのか。これを示した作品が「作品15 世界的大事件の始まり」と「作品16 大戦争の行方」であった。

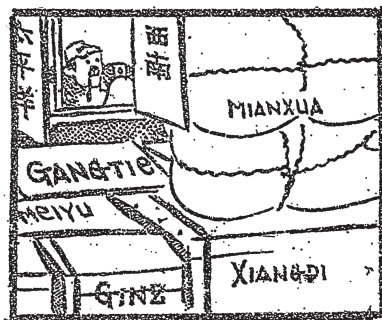
興味深いことに、「作品15」では真珠湾には言及していない。それよりもアジア太平洋戦争の勃発は、黄金や綿花や鉄の略奪、つまり南洋諸島や東南アジア地域への侵攻として認識されていた。そして、日本の戦争を「猫の前のネズミの芝居」と形容していた。すでに数年間日本との抗戦を続けていた中国人のこころざしであろうか。「作品16」では、ABCD包囲網の形成と世界25か国の対日宣戦布告という国際政治の劇的変化を説明していた。緒戦における日本軍の攻勢をうけとめ、日本軍が「猛虎に羽が生えるようになっても」、つまるところは逃げおおせないだろう、と分析していた。マンガながら戦争の帰趨にたいするまことに的確な表現であったと言うべきであろう。

作品15 世界的大事件の始まり

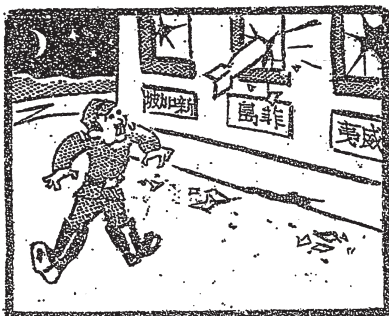
(出所)『太岳日報』1941年12月24日



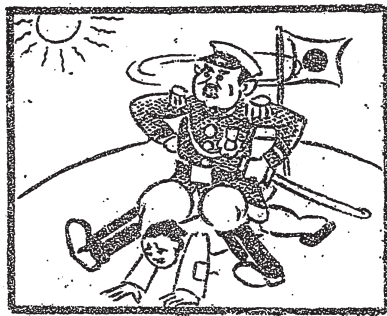
- 1 日本が侵略して4年半が過ぎて、
中国の民衆は貧窮し財産は失われました。



- 2 南洋群島の黄金も、棉花や鋼鉄
などもごっそりと奪われました。



- 3 12月8日の未明に、日本は軍隊を
動かして大戦争を始めました。



- 4 日本は東亜に覇を唱えたのですが、
それは猫の前のネズミの芝居です。

作品 16 大戦争の行方

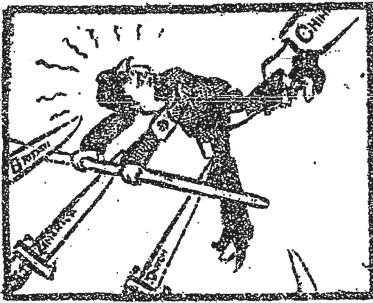
(出所)『太岳日報』1941年12月30日



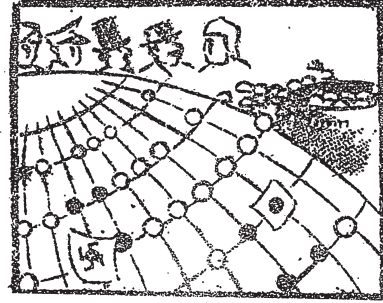
1 ファシストの強盗はきわめて大胆で、キョロキョロあたりを見回しています。



2 25の国家が宣戦布告をしたので、日本は肝をつぶしてしまいました。



3 ABCDの4国は巧みに計略をたて、生死を共にして利益に結ばれています。



4 局面をきちんと定めて見たならば、日本が猛虎に羽が生えるようになっても逃れることは難しいでしょう。

おわりに

抗戦マンガから分かることはなにか。それは、抗日根拠地社会で、民衆を抗戦に動員するために「民主主義」的統治体制を樹立しようと努力する中国共産党の姿である。その理論的核心が「三三制」だった。「三三制」は、党派を超えた共闘によって民主主義を実現するための「核心的価値観」だったのである。しかし、当時の根拠地社会には、市民意識の担い手は存在しなかった。だから、「労働英雄」という形の民衆の「お手本」を創る必要があった。そして、彼らは中共の基本理念を体現する民衆だったのである。紹介した抗戦マンガでは、王黒牛や葉彦明（彼は実在の人物）という英雄が大活躍していた。現実の歴史がマンガを創り、マンガが歴史をさらに豊かに描写するという相互作用をここに見ることができる。

抗戦マンガからは、当時の中国民衆が日本人（日本兵、日本軍）をどのように呼んでいたかを知ることができる。引用にあたっては、マンガの説明文から中国語原文を省略したが、以下に中国語を記すと、作品2・3・4・6・8では「(日本) 鬼子」、作品4では「小東洋」、作品15では「日寇」

と「小日本」である。「日本鬼子」は、いまでも民間に伝わる日本人にたいする罵倒的感情をともなった表現である。「日寇」は「日本の侵略者」という意味のいささか硬い表現である。「小東洋」は中国を間に挟んだ「西洋」の対概念であり、近代中国では「東洋史」は「日本史」を指していた(今回のマンガのなかにはなかったが、「東洋鬼子」という表現も広く使用されていた)。「小日本」は「大中華」にたいする対概念だった。現代中国の学術的著作では、以上の表現は基本的に使われていない。「日本鬼子」が侵略戦争の責任を想起させられる表現であったことを、私たちは肝に銘じるべきであろう。他方で、当時の中国民衆をさす日本人の表現としては、「土民」が使われていたことが確認される¹⁶⁾。

ここで紹介した抗戦マンガが発生したすべての現実を取り上げていたわけではない。戦場における悲惨な戦闘や日本軍による中国民衆の虐殺、占領地における性暴力の発生や多くの中国人女性が徴発された日本軍慰安婦の問題など、マンガに描くことが困難な現実は取り上げられていない。

小稿では、新聞に掲載された抗戦マンガをとりあげたが、現実の戦場でもマンガがプロパガンダとして使われた。1941年5月から6月にかけて山西省南部の「中原会戦」に参加した長沼喜内という元兵士は次のように語った。「支那の集落にはかならず城壁がある。ある時、その中へ入ると、壁にマンガが描かれていた。木があって長く伸びた枝に首を吊るされている日本の総理大臣がかかれていて、その側に日本語で『戦争をやめて国で待っている親や子のところへ早く帰りなさい』と書いてあった。なんで顔色も格好も同じ人たちと戦わなければならないのだろうと思った¹⁷⁾。ここに記されているのは、大きな壁一面の一コマ・マンガをさしている。このマンガは当のとつくに消失してしまったと思う。こういう作品まで取りあげることができたなら、もっときめ細かく抗日戦場の社会を再現することができたであろう。

注:

- 1) 「抗日支那軍の現況—支那事変三周年に際して」、内閣情報部編刊『週報』第194号、1940年7月3日
- 2) 「撃退窜犯故県鎮敵」『太岳日報』1941年8月3日
- 3) 「沁県盤道村、引火自焼身、全村残遭禍殃」『太岳日報』1941年6月18日
- 4) 「皇軍的墮落(立金)」『太岳日報』1940年9月13日
- 5) 「太岳風光: 葉彦明」『太岳日報』1941年2月15日
- 6) 「洪洞曹生村南、將動工開渠」『太岳日報』1941年3月12日
- 7) 「霍県農救号召、快耕快耘」『太岳日報』1941年3月12日
- 8) 「抗戦軍人家属、事事有人照應」『太岳日報』1941年5月6日
- 9) 「村春委会應該作些什麼?」『太岳日報』1941年4月9日
- 10) 「為實現婦女十大綱領而鬪争(張維奇)」『太岳日報』1941年3月15日
- 11) 「一年来的太岳区婦女運動(王善玲)」『太岳日報』1941年3月6日
- 12) 「擁護『三三制』」『太岳日報』1941年5月30日。原文は次の通り。「什么叫『三三制』呢?『三三制』就是抗日民主政府的官员不要由那一党那一派独占,而由赞成抗日又赞成民主的各党各派,与无党无派的人士共同来赶。这样组织的政府,就绝不会是『一党专政』的政府,而是各党各派与无党无派人士共同合作的政府。在政府里,共产党员只占三分之一,或者不到三分之一。剩下那三分之二,由其他抗日党派·无党无派人士担任。比如,普通农民·知识青年·士绅各流·开明地主等。共产党这种『不愿独占』『有事大家商量』的精神,是值得咱们拥护和其他党派学习的『三三制』的政权,一定可以使各党各派更加团结,使老百姓的利益更有保证,也就使打鬼子的力量更加强大。『三三制』有这样好处。所以我们要拥护『三三制』。『三三制』就是新民主主义的政权形式」。中国共産党が国民党に倣って「党国家制度」を実現したのは周知の歴史である。党は鉄砲(軍)を創って国家を創った。だから、今もって省や市の党書記のほうが省長や市長よりも権勢をふるっている。そういう視点でみると、「三三制」は「党国家制度」の本質をカムフラージュするための制度だったと見ることも可能で

ある。しかし、あの時代には党派を超えた共闘によって民主主義を実現するための組織原理だった、と筆者は思う。

- 13) 「北石村試選勝利了（江横）」『太岳日報』1941年8月21、27日
- 14) 「瘟疫為什麼在農村流行」『太岳日報』1940年8月3日
- 15) 「辺府決議、設各級衛生組織」『太岳日報』1941年12月27日
- 16) 一兵卒として中国に従軍した武田泰淳には「土民の顔」（1938年）があり、華北戦場に従軍した岡部正美も「土民」と記していた。武田泰淳（1971）『揚子江のほとり』芳賀書店、岡部正美（1998）『日本、東洋鬼子』日本図書刊行会、を参照。
- 17) 阪野吉平（2015）『徴兵体験百人百話』17出版、84頁